経験から減災を

北杜市立甲陵中学校　二年　羽生　健

父が以前勤めていた北杜市武川町にある会社は、昭和三十四年の伊勢湾台風と呼ばれる台風七号と台風十五号によって、近くを流れる大武川・小武川が氾濫して、堤防が決壊して多くの家屋が流され、亡くなった人もたくさんいて、大きな被害にあった場所だと、祖父が話してくれたことがある。

小学生の頃、甲府方面に出かけるときに、国道二十号線を車で走っていると、武川町の牧原交差点の近くで川原の工事をしているのを何度も見たことがあった。何をしているのかわからなかったので、父に聞くと、

「川が氾濫しないように、川の流れを変える工事だと思うよ」。

と、教えてくれた。その当時はあまり深く考えていなかったが、それは「砂防」という土砂災害を防ぐための工事だということがわかった。

砂防は、ただ川の流れを変えるものではなく、土砂の流れを危険のない安全なものに変えるためのもの、つまり私たちの生活を守るための大切な工事なのである。

今回の西日本の豪雨の被害は、雨が長く続いて地盤がゆるんで土砂崩れが起きたり、川の水位が上昇して氾濫したり、堤防が決壊して川の水が街に流れ込んで大きな被害になってしまった。多くの人が亡くなり、昨日まで家族そろって過ごしていた自宅が一瞬にして流されてしまい、いつもの生活を送れなくなっている様子をテレビで見た。

また、山梨でも何日も雨が続いて、天気予報のアプリで雨雲レーダーの画面を見ると、数時間後の予想を見ても雨雲が途切れないことがあった。しかし、周りの県が雨雲に覆われていても、山梨県だけ穴が開いたように雲が途切れている時があり、「山梨は周りの山に守られている」と言う人も多い。

そのため被害にあった人の様子を見ても、

「大変だな」としか思わなかったし、自分の家は流されることもないし、大丈夫だろうと思うだけだった。

しかし、祖父の話を思い出して、自分が住む北杜市でもかつて水害があったのだから、それは他人事ではなく、自分の身近で起こってもおかしくないことだと、思うようになった。

地震・台風・雷・豪雨・竜巻など、自然の現象は、発生することを止めることはできない。だから、「地震が起きないといいな」、「雨が降らないといいな」と願うことしかできないと思っていたが、それでは自分の身を守ることはできない。

東日本大震災が起きた時、多くの人が津波に襲われて亡くなったが、大きな地震の後の津波を防ぐことはできないので、津波が来る前に自分がどのような行動をすべきか、普段から考えておき、心構えを持っておくことが必要だと経験した人たちが語っている。

　私たちは災害に対する準備というと、まず水や食料を用意することを思いつく。もちろん必要な水や食料品など、物を準備することも大切だが、災害が発生したときに、自分がどこにどうやって逃げるか、自分の身を守るためにしなければならないことを普段から考えておくことが大切だと思う。

　過去のことを祖父が話してくれたことで、かつて身近な場所で本当に災害があったと知ることができ、他人事ではなく自分の身にも起こることだと考えることができた。その土地に長く住んで、よく知っている人はその体験を知らない世代に伝えていくこと、知らない世代の私たちはその体験を聞くことが大切だと思う。

　また、自分の住んでいる町の防災マップを確認して、あらかじめ危険な場所や避難する場所を知っておくことも必要である。危険な場所がわかっていれば、避難するときにその場所を避けることができるし、家族と離れば

なれになっていても、避難場所を確認しておけば、携帯電話がつながらなくても家族の無事や安全を知ることができる。

そして、万が一、災害が発生しそうな状況になったら、テレビやラジオ、インターネットなどで「正確な情報」を入手することが大切である。デマや嘘の情報ではなく、正しい情報を確認すれば、早く避難することもできる。

今後、どのような災害が起きるか、誰にもわからない。防災は一人でできるものではない。しかし、どんな災害が起きても一人の犠牲者も出さないようにする減災は可能だ。いつ災害が起きてもあわてず、冷静に自分の身を守ることを考えていくようにしたい。

20×20